

1959年の原爆と1895年の離婚

— *The Time Machine* のマッチと H. G. Wells の理念と未練

小 島 基 洋

はじめに

紀元 80 万 2701 年の世界に広がる火災——『タイム・マシン』(1895)の主人公タイム・トラヴェラーが使用するマッチの一本は、未来世界に予期せぬ山火事を起こす。その火は彼に襲い掛かるモーロック (Morlock) たちを次々に飲み込んでいくのだが、非道にも彼を恋い慕うイーロイ (Eloi) の娘ウィーナ (Weena) の命をも奪い去ることになる。一連の展開に、本書をリアリズムとして読む読者は幾つかの不自然な点を発見することになるだろう。なぜタイム・トラベラーはマッチにかくも異様な執着をみせていたのか。そして、そのマッチが結果として引き起こしたウィーナの惨死について、彼はなぜ反省の色をみせないのか。主人公の不可解な振る舞いに、作者ウェルズの秘められた想い——世界平和への気高い理念と、別れた妻へのいじらしい未練——を見出すのが本稿の目的である。

武器としてのマッチの実用性／象徴性

自作のタイム・マシンで未来世界に辿り着いたタイム・トラヴェラーには、倒すべき敵がいる。彼のマシンがモーロックと呼ばれる野蛮な人種によって盗まれてしまったのだ。地下世界に住むモーロックは青白く、猿のように小柄だとはいえ、地上世界に住む優美で非力なイーロイたちの加勢は当てにできず、主人公はたった一人で彼らに立ち向かうことになる。そこで必要となるのは、集団で襲い掛かるモーロックを手早く倒すための武器だ。

“... I was roused by a soft hand touching my face. Starting up in the darkness I snatched at my matches and, hastily striking one, I saw three stooping white creatures similar to the one I had seen above ground in the ruin, hastily retreating before the light. (69; ch. 6)

闇夜に紛れて忍び寄る三人のモーロックに対し、主人公はマッチを擦って対抗しようとする。陽の射さない地下に住む彼らの目は光に弱いという設定があるのだ。

目くらましとして頻繁に使用されることになるマッチは、しかし、モーロック相手とはいえ、常に有効な武器であったとは言えない。むしろ、作品内で繰り返し強調されるのは、その使い勝手の悪さである。主人公が19世紀から偶然、持参したマッチは次第に数を減らしていき、遂には大事な戦闘場面で底をつくことになる。

“I lit my last match . . . and it incontinently went out. But I had my hand on the climbing bars now, and, kicking violently, I disengaged myself from the clutches of the Morlocks, and was speedily clambering up the shaft, while they stayed peering and blinking up at me : (72-73 ; ch. 6)

最後のマッチを失った主人公は自らの肉体に頼るほかない。追いつがるモーロックを全力で蹴り落とすことによって、彼は這う這うの体で地上世界に帰還することになる。しかし、マッチをめぐるトラブルはこれに留まらず、主人公はモーロックとの最終決戦においても着火に失敗するのだ。

“I could already hear their murmuring laughter as they came towards me. Very calmly I tried to strike the match. I had only to fix on the levers and depart then like a ghost. But I had overlooked one little thing. The matches were of that abominable kind that light only on the box. (102-03 ; ch. 10)

タイム・マシンに乗り込んだ主人公は、迫りくるモーロックを追い払うために、満を持してマッチを擦る。だが、再入手したマッチが黄燐マッチであったためか、火がつかない。結局、彼はモーロックたちに頭突きを食らわして、未来世界からの脱出を図ることになる。このように武器としての不安全感ばかりが強調されるマッチであるが、上述の欠点——数に限りがあること、着火が難しいこと——は、あるものを手に入れさえすれば、容易に解消される問題でもある。

“ . . . In the next place, I hoped to procure some means of fire, so that I should have the weapon of a torch at hand, for nothing, I knew, would be more efficient against these Morlocks. . . . (81 ; ch. 7)

マッチの火を松明に移せば、炎は安定的に維持され、神出鬼没のモーロックに対してより有効な武器となる——そう主人公自身も認識している。しかし、松明の存在が彼の脳裏を再びよぎることはなく、タイム・トラヴェラーは最後までマッチを片手に

モーロックとの戦闘を不器用に繰り返すことになる。なぜ、作者ウェルズは主人公に不便なマッチを擦り続けさせるのだろうか。

タイム・トラヴェラーのマッチは、その実用性以上に大切な意義があるのかもしれない。実際、作者は主人公に本物の武器を獲得する機会を与えてすらいる (ch. 8)。タイム・トラヴェラーはサウス・ケンジントン博物館の遺構に赴くのだが、しかし、彼がそこから持ち帰るのは、ある機械から力任せにもぎとったレバー (lever) に過ぎない。武器の展示室を訪れた際に、斧 (hatchet) や刀 (sword) との交換を検討もするのだが、それを実行に移すことはないのだ。更に、同じ部屋で多くの銃器 (guns, pistols, and rifles) を見つけるものの、弾薬が駄目になっているのではないかと推測し、こちらも手にすることはない。一方、別の展示室で見つけたダイナマイトに関しては、大いに期待をするものの、爆破実験までおこなった上で、結局は不発弾であることが判明する。最終的に彼が博物館で手にしたのは先述のレバーと、ひと箱のマッチである。“And at last, in one of the really air-tight cases, I found a box of matches. Very eagerly I tried them. They were perfectly good. They were not even damp.” (87-88 ; ch. 8) 作者ウェルズは、タイム・トラヴェラーにわざわざ武器を入手する可能性を与えた上で、彼の手に、その原始的な代用品だけを残すこととなる。この不可思議な展開の意図は推測する以外にないのだが、そこに作者の思考の痕跡を見出すことは可能だろう。すなわち、ウェルズは主人公の武器から実用性を奪い、代わりに象徴性を付与しようと考えたのではないか。用途が特化したライフルやダイナマイトよりも、汎用性のある鉄の棒やマッチの方が、実用性は劣ろうとも、より豊かな象徴性をもつのだ。

タイム・トラヴェラーのマッチは何を象徴するのか。その問いに答える際には、本小説の四年前に出版されたウェルズのエッセイ “The Rediscovery of the Unique” (1891) を参照するのが常道である。ウェルズは、科学をマッチに例えた上で、本エッセイの最終段落を以下のような詩的ヴィジョンで結んでいる。

Science is a match that man has just got alight. He thought he was in a room—in moments of devotion, a temple—that his light would be reflected from and display walls inscribed with wonderful secrets and pillars carved with philosophical systems wrought into harmony. It is a curious sensation, now that the preliminary splutter is over and the flame burns up clear, to see his hands lit and just a glimpse of himself and the patch he stands on visible, and around him, in place of all that human comfort and beauty he anticipated—darkness still. (*Early Writings* 22-31)

若きウェルズは「科学」——世界の真理を明らかにすることが期待されながらも、その効果は限定的である——のメタファーとしてマッチを用いている。多くの研究者が

指摘するように¹⁾、小説『タイム・マシン』において、極めて有効でありながらも、しばしば機能不全に陥るマッチの存在は、このヴィジョンに呼応しているものとも読めるのだろう。

だが、『タイム・マシン』における一本のマッチが、その終盤で示す強大な威力に着目すれば、それを新たに「大量破壊兵器」のメタファーだと捉えることが可能かもしれない。主人公が使用した一本のマッチは山火事を起こし、多くのモーロックが犠牲になっているのだ。実際、ウェルズは第一次世界大戦を前にして、小説『解放された世界』(*The World Set Free*, 1914) を出版する。そこには、新兵器の脅威に晒された世界のヴィジョンが提示されている。

By the spring of 1959 from nearly two hundred centres, and every week added to their number, roared the unquenchable crimson conflagrations of the atomic bombs, the flimsy fabric of the world's credit had vanished, industry was completely disorganised and every city, every thickly populated area was starving or trembled on the verge of starvation. Most of the capital cities of the world were burning; millions of people had already perished, and over great areas government was at an end. (120-21; ch. 3)

原子爆弾を保有した国が互いを攻撃するうちに、多くの国家が存亡の危機を迎える——そんなシナリオをウェルズは描き、続けて、その時の人類の状況を表現するにふさわしい、あるメタファーを紹介する。

Humanity has been compared by one contemporary writer to a sleeper who handles matches in his sleep and wakes to find himself in flames. (121; ch. 3)

「マッチをいじりながら居眠りをし、目覚めたら自身が炎に包まれていることに気付いた男」——ここで言及されたメタファーは、「同時代の作家」によるものとされる。だが、1959年を舞台とした本作が、執筆時から45年も先の近未来小説であることから、その作家が実在しないことは明らかだ。この比喩を創作したのは、もちろん、ウェルズ自身——小説『タイム・マシン』の作者——であろう。若きウェルズが『タイム・マシン』で描いたのは、焚火を起こしたまま眠りに落ちて、敵方モーロックの命のみならず、自らの命をも危険に晒したタイム・トラヴェラーの姿であった。ウェル

1) 『タイム・マシン』に登場するマッチと、ウェルズのエッセイ“The Rediscovery of the Unique”を結びつけて論じた研究者に Sanna (238-39), Draper (38-39), McConnell (76-77) などがいる。

ズが『タイム・マシン』（1895）で擦らせた一本のマッチは、その約20年後に『解放された世界』（1914）で原子爆弾という名前を与えられたのかもしれない。平和の理念を実現するには、国家亡き後に世界政府を樹立せねばならない——『解放された世界』でそう訴えたウェルズは、日本の上空で原爆が炸裂する50年も前に、『タイム・マシン』で大量破壊兵器の象徴たるマッチを擦ったことになる。

タイム・トラヴェラーの一本のマッチ——「大量破壊兵器」——は森を焼き、敵であるモーロックたちを死に追いやるだけではない。“I walked about the hill among them [Morlocks] and avoided them, looking for some trace of Weena. But Weena was gone.” (97-98; ch. 9) 自身が一番大切に思うイーロイ族の娘ウィーナの命をも奪い去ることになる——それが次に考えてみたい問題である。

死んだウィーナ／別れたイザベルへの罪意識

一本のマッチがもたらしたウィーナの死について、主人公タイム・トラヴェラーは奇妙なほどに、その罪意識を欠いている。もちろん、彼が殺意をもって彼女を殺したわけではないのだが、少なくとも、彼女の救護活動に最善を尽くしたとも言えない。

“Stepping out from behind my tree and looking back, I saw, through the black pillars of the nearer trees, the flames of the burning forest. It was my first fire coming after me. With that I looked for Weena, but she was gone. The hissing and crackling behind me, the explosive thud as each fresh tree burst into flame, left little time for reflection. My iron bar still gripped, I followed in the Morlocks’ path. (96 ; ch. 9)

目を覚まし、再び戦闘態勢に入った主人公は、モーロック除けの焚火が延焼し、森を覆いつつあることに気づく。それと同時に、気を失って倒れていたはずのウィーナの姿がないことも認識するのだが、燃え盛る炎が迫る中、彼は「考える間もなく」モーロックたちと共に逃げ始める。主人公がウィーナを見捨てるのは、しかし、今回が初めてではない。彼は出会った頃のウィーナの様子をこのように描いている。

“... She wanted to be with me always. She tried to follow me everywhere, and on my next journey out and about it went to my heart to tire her down, and leave her at last, exhausted and calling after me rather plaintively. ... Yet her distress when I left her was very great, her expostulations at the parting were sometimes frantic, and I think, altogether, I had as much trouble as comfort from her devotion. (55-56; ch. 5)

自分と一緒にいたがるウィーナを主人公は疎ましく思っていたのだ。二人の関係は、川で溺れたウィーナを主人公が助けたことに始まり、その四日後に山火事で意識を失ったウィーナを彼が置き去りにしたことで終わる。見捨てるという結末は、偶然の産物ではなく、常にタイム・トラヴェラーの中に潜在した選択肢であったのだ。

しかし、タイム・トラヴェラーがウィーナのことを一貫して軽視していた、というわけではない。先ほどの引用も以下のように続く——“Nevertheless she was, somehow, a very great comfort”。彼は二人の関係を“a queer friendship” (55; ch. 5) とも呼んでいるが、実際には男女関係に近いものであったことは²⁾、次の描写に示唆されているのだろう。

“... in spite of Weena's distress, I insisted upon sleeping away from these slumbering multitudes.

“It troubled her greatly, but in the end her odd affection for me triumphed, and for five of the nights of our acquaintance, including the last night of all, she slept with her head pillowed on my arm. But my story slips away from me as I speak of her. (56-57; ch. 5)

主人公は——話が脱線したと言いつつも——ウィーナを他のイーロイ族の人々から引き離して、二人きりで寝ていたことを告白する。やがて19世紀に連れて帰ろうとまでした相手ウィーナを死に至らしめたことに、彼が落胆しなかったはずはないのだ。

しかし、主人公はウィーナの死の責任を引き受けようとはしない。彼女の死が自らのマッチに起因することには沈黙を貫く一方で、食人種モーロックの悪行に関しては饒舌になる。夜明けを迎え、ひとり安全な丘に辿り着いた彼は、ウィーナの死について、次のような考えを巡らせていた。

“I searched again for traces of Weena, but there were none. It was plain that they [Morlocks] had left her poor little body in the forest. I cannot describe how it relieved me to think that it had escaped the awful fate to which it seemed destined. As I thought of that, I was almost moved to begin a massacre of the helpless

2) ウィーナに関しては、「作品最大の傷」と呼んで意義を認めない Bergonzi (50) のような大家もいる一方で、Sayeau (438-41) は、主人公を未来世界に(性的に)誘惑するものの象徴として彼女の存在を重視している。Cantor (39-40) はウィーナを「ポカホンタス・モチーフ」の系譜に位置づけ、彼女が主人公と「異人種間結婚」をする危険性があったからこそ、物語上、死ぬ必要があったのだと論じる。

abominations about me, but I contained myself. (98-99; ch. 9)

モーロックがウィーナを森に置き去りにしたことは「明白」だと、主人公は語る（本当に「明白」なのは、彼自身がウィーナを置き去りにしたことなのだが）。続いて、彼女が「恐ろしい運命」から逃れられたことを思うとほっとした、と述べられる。すなわち、モーロックはウィーナを（「置き去り」にしたのであって）食してなどいないのだと彼は考えている。だが、実際には、主人公が目を覚ました時にはウィーナは既に姿を消していたのであり、その時、既にモーロックが彼女を餌食にしていたことも十分にありうる³⁾。ウィーナの最期に関する主人公の根柢のない楽観は、彼の罪悪感を軽減する為の方便に過ぎない。それが明らかになるのが続く文章である。「そのことを考えると、僕は周囲にいる無力な怪物を皆殺しにしてやろうかと思った」とあるのだが、彼が腹の底ではウィーナが餌食になった可能性を排除できていないことがここに露呈しているのだ。というのも、文章中の「そのこと」とは何かと考えてみると、答えは、（前文からの流れの中では論理が破綻しているのだが）食人種モーロックがウィーナを食べたこと以外にはないのである。主人公は支離滅裂な思考の中で、スケープゴートにしたモーロックに八つ当たりをし、自らの罪悪感から目を逸らそうとしているのだろう。

ウィーナを置き去りにしたことを直視せず、自らの罪意識から必死で逃れようとする主人公の姿には、作者ウェルズ自身の苦悩が透けて見える。『タイム・マシン』の連載が *The New Review* 誌上で始まる 1895 年 1 月、奇しくもウェルズは妻イザベル (Isabel Mary Wells) との離婚を成立させている。既に恋人キャサリン (Amy Catherine Robins) と暮らし始めてから一年が経とうとしていた。ウェルズは 91 年 10 月に従姉イザベルと結婚する。しかし、翌 92 年に彼のクラスに出席していたキャサリンと出会い、次第に関係を深めていく。93 年の 12 月には、夫妻はキャサリンの実家に招かれることになるのだが、イザベルが夫とキャサリンのただならぬ関係性に気付かぬわけはなく、その点を問いただされた夫はキャサリンへの恋心を認める (Norman 88-98)。ほどなくして、年末にウェルズは家庭を捨てて、キャサリンとの同棲を開始している。『タイム・マシン』の連載依頼が舞い込むのは、翌 94 年秋のこと、ウェルズの離婚協議がおこなわれていた時期であった。主人公タイム・トラヴェラーにウィーナを見捨てさせたウェルズは、この時、自身も妻イザベルを見捨てていたのだ⁴⁾。

3) Lee (253-56) は、モーロックが主人公の身体を繰り返しまさぐろうとすることに着目し、彼が常にモーロックの食肉の対象となっていたと読む。であれば、タイム・トラヴェラーの睡眠中（体をまさぐられて目を覚ます）にウィーナが食べられていたことは、尚更、自然なことのようと思われる。

4) ウィーナのモデルを伝記的事実に求める読みとしては、Hammond (182-84) のウィーナ=キャサリン（二番目の妻）説がある。両者とも、体格的に小柄であったこと、主人公/ウェルズ

しかし、ウィーナの死に対する責任から逃避するタイム・トラヴェラーと違って、ウェルズは別居する妻イザベルへの責任を全うしようとする。家を飛び出してから一年、離婚が成立する前月である1894年12月のこと、ウェルズは夫妻の共通の知人であったエリザベス・ヒーリー (Elizabeth Healey) に、このような手紙を書いている。

I'm very much obliged to you for your letter. Is there anything I can do to help Isabel? ...

I hope you'll go to see her if you possibly can and I'd be very glad to know about her. She writes to me but it's scarcely to [be] expected she would tell me very much.

It's a dismal tragedy & it's entirely my doing. Don't blame anyone else. I can't stop the hum of Death. So far as I can see all that is possible for me is to go with my own work & keep her at least from urgent material necessity and give her the possibility of change & new interests. But beyond that the less I come into her life the better. She wants friends, sympathy and interests. (*Correspondence* 227)

ウェルズは近況を詳しく知らせてこない妻を心配し、何か助けられることはないかと尋ねている。「それは全て自分がしたこと」——そこにだけ下線が引かれている——だと潔く認めた上で、「自分にできることの全て」として、金銭的な援助(と新たな興味関心を与えること)を挙げている。妻の精神状態を気にかけて、自らの責任を認め、十分な補償をする——タイム・トラヴェラーとは違い、作者ウェルズはこれ以上ない誠実な対応をみせているのだ、と解釈するか、不倫して妻を見捨てた男の醜悪な自己陶醉と解釈するかは、読み手によって判断が分かれるだろう。ひとつ指摘しておくべき点は、「それ」を「陰鬱な悲劇」と呼び、「全て自分がしたこと」だと語るウェルズが、決してその代名詞の指示対象を明らかにしていないことである。もしも「それ」を具体的に名指すとしたら、「浮気」、あるいは、妻の存在がありながら、女子学生と秘密裏の逢引きを重ね、関係性を問われると、妻を捨てて彼女と同棲を始めたこと、というあたりが妥当だろう。当時のウェルズが自らの悪行から少しでも逃れようとしているのは、この手紙から見ると、残念ながら否定のしようがない。

作者と同様、タイム・トラヴェラーもまた、自らの罪を名指すことができない。ウィーナがモーロックに食べられていなかったとすれば、おそらく置き去りにされた

↓
ズに献身的であったこと、また、執筆時のウェルズがキャサリンと同居していたことが理由として挙げられている。Showalter (72) も同じく、ウィーナとキャサリンを重ねた上で、ウィーナを鬱陶しく思う主人公の中に、作者ウェルズの新婚家庭からの逃避願望を読み取るようにとする。

彼女は森で焼死したことになる。だが、火事を起こした張本人である主人公が、その点に言及することは遂にない。その代わりに、彼はウィーナの死を次のように総括する。

“... I felt the intensest wretchedness for the horrible death of little Weena. It seemed an overwhelming calamity. Now, in this old familiar room, it is more like the sorrow of a dream than an actual loss. But that morning it left me absolutely lonely again—terribly alone. (99; ch. 9)

主人公はウィーナの喪失を嘆き、自らの孤独を託つのだが、注目すべきは二番目のセンテンスで、彼女の死を「圧倒的な災難」であったと述べている点である。その表現には——作者が妻との別れを「陰鬱な悲劇」と呼んだのにも似て——当事者性を回避しようとする彼の心性が表れているように思われる。主人公がウィーナの死から、彼独自の方法で逃げ出すのは次の瞬間である。「今や」ウィーナの死は「現実の喪失」ではなく、「夢の中の悲しみ」に感じられる——主人公はタイム・トラヴェルによって、「圧倒的な災難」から80万年もの時を遠ざかったのだ。

終わりに

ウィーナを見捨てたタイム・トラヴェラーの無慈悲さを一方的に非難するのは、彼にとっては余りに酷かもしれない。というのも、彼は再び、タイム・マシンに乗って、ウィーナを救出に向かったのではないかとも考えられるからだ⁵⁾。一方、作者ウェルズも、自転車に乗って——タイム・マシンは自転車をモデルに構想されている⁶⁾——元妻のもとに向かうことになる。小説『タイム・マシン』の出版から数年経った1898年（あるいは99年）のある日、ウェルズはイザベルが経営する鶏農場にいた。表向きは資金援助のためであったが、実際には彼はイザベルに会いたいという衝動を抑

5) タイム・トラヴェラーの行き先がどこであるかは、テキストに明示されていない以上、不明だとするのが正式な答えとなるかもしれない。さまざまな説については、Harry M. Geduldが付した注釈(Wells, *The Definitive “Time Machine”* 119)を参照のこと。しかし、主人公がウィーナにもらった花を他人に譲ろうとしなかったこと(113; ch. 12)、また、その花が友愛の証として言及されて作品が終わること(118; “Epilogue”)を考えれば、彼がウィーナを探しに行ったのではないかという読み方は最も自然なものであろう。たとえば、百周年を記念して刊行され、ウェルズの遺族も正式に続編として認定したStephen Baxterの*The Time Ships* (1995)も、その見方をとっている。

6) タイムマシンの座席は“seat”ではなく、“saddle”であることから、ウェルズが当時、愛好していた自転車をモデルとしたのだと考えられている。(Wells, *The Definitive “Time Machine”* 96)を参照のこと。

えきれなかったのだ (Norman, 163-67)。夜が更けていったとき、彼は元妻に未練たらしく、哀れな懇願をした——と晩年になって回想している。

Suddenly I found myself overcome by the sense of our separation. I wanted fantastically to recover her. I implored her for the last time in vain. (*Experiment* 431; ch. 7)

もちろん、イザベルはそれを軽くいなし、腕の中で子供のように泣きじゃくる元夫をなだめ、夜明けの農場を自転車を出てゆく彼の背中を見送ることになる。2度と19世紀に戻ることのなかったタイム・トラヴェラーとは対照的に、妻キャサリンのもとに戻ったウェルズは、その後、百人もの愛人をつくりながら、20世紀前半の知の巨人として作家生活を全うすることになる。

参考文献

- Baxter, Stephen. *The Time Ships*. Harper Voyager, 2014. Kindle.
- Bergonzi, Bernard. *The Early H. G. Wells: A Study of the Scientific Romances*. Manchester UP, 1961.
- Cantor, Paul A., and Peter Hufnagel. "The Empire of the Future: Imperialism and Modernism in H. G. Wells." *Studies in the Novel*. vol. 38, no. 1, 2006, pp. 36-56.
- Draper, Michael. *H. G. Wells*. Palgrave Macmillan, 1988.
- Hammond, John R. *A Preface to H.G. Wells*. Routledge, 2014. Kindle.
- Lee, Michael Parrish. "Reading Meat in H. G. Wells." *Studies in the Novel*, vol. 42, no. 3, 2010, pp. 249-268.
- Mackenzie, Norman., and Jeanne Mackenzie. *The Life of H.G. Wells: Time Traveller*. 2nd ed., Random House, 1987.
- McConnell, Frank D. *The Science Fiction of H. G. Wells*. Oxford UP, 1981.
- Sanna, Antonio. "Are Human Beings Ultimately Ignorant? Huxleian Preoccupations in H. G. Wells's *The Time Machine* and *The War of the Worlds*." *The AnaChronisT*, vol. 17, 2012, pp. 229-44.
- Sayeau, Michael. "The Time Machine and the 'Odd Consequence' of Progress." *Contemporary Justice Review*, vol. 8, iss. 4, 2005, pp. 431-45.
- Sherborne, Michael. *H. G. Wells: Another Kind of Life*. Peter Owen Publishers, 2011. Kindle.
- Showalter, Elaine. "The Apocalyptic Fable of H. G. Wells." *Fin de Siècle, Fin du Globe: Fears and Fantasies of the Late Nineteenth Century*. Edited by John Stokes. Macmillan, 1992.
- Wells, H. G. *The Correspondence of H.G. Wells*. Pickering and Chatto, vol. 1, 1998.
- . *The Definitive Time Machine: A Critical Edition of H. G. Well's Scientific*

- Romance*. Indiana UP, 1987.
- . *Experiment in Autobiography: Discoveries and Conclusions of a Very Ordinary Brain (Since 1866)*. T. Fisher Unwin, 1966.
- . *H.G. Wells: Early Writings in Science and Science Fiction*. U of California, 1975.
- . *The Time Machine*. T. Fisher Unwin, 1924.
- . *The World Set Free and Other War Papers*. T. Fisher Unwin, 1926.